

あめのかぶき　あまやすことや

天之哥舞伎は天易真兮と袂を分かつことにした。意見の相違と言うよりは感性の求めているものが違っていた。

似てはいたが異なっていたのである。哥舞伎のアヴァンギャルドで矯激な芸術的嗜好は真兮のようにストイックで理屈っぽい前衛性に対し、次第に鬱憤や倦怠を感じるようになってきていた。真兮が将に彼の著作である『空』を壮大なプログレッシブ・ロックに編み上げようとしていた矢先、ほとんど裏切り行為のようにも見えたが、

「気にすることはない。構わないさ。君は君のやりたいようにやればよい。小生も又同じだ」

その言葉に哥舞伎も応え、「ああ、俺は、何かこう、感性に訴えるような、けれども名状し難くて、理解もできない、奇蹟のようなものがやりたいんだ」

そう言うて最初に探し始めたのはギタリストだった。真兮のバンドの中で哥舞伎はヴォーカルとギターが担当だったが、己の技術力の不足を知っていた。麗川<sup>れいかわ</sup>琉麗<sup>るれい</sup>は長い髪の手入れに毎日4時間もかける白哲玲瓏な優男だったが、メタル系ギターの弾き手だった。バロック調の速弾きが特に見事で正確無比でありながら聴き取れないほど速く、なおかつ華麗であった。ドラムスは結局、白舟<sup>しらかね</sup>大楽<sup>たいがく</sup>に落ち着いた。大楽は真兮のバンドのドラマーだったが、やはり哲学向きではなかった。

真兮のバンドはベース・ギターの彝佐<sup>いさわら</sup>早蕨<sup>さわらび</sup>を残すのみとなったわけだ。早蕨は、

「新しい仲間を探しましょう。僕らの夢は遠大です。理想は高邁です。人類の必要です。必ず実現させなければなりません。大いなる真理なのですから。この大義は天に通じます。神も御嘉納されます」

しかし真兮は穏やかに微笑み、

「さあ、早蕨、お茶でも飲もうか」

数か月間、修行僧のように、苦行する沙門のように、私設のスタジオに籠って録音を続けた真兮と早蕨は遂に完成した。その頃、哥舞伎は琉麗と炎春慶<sup>ほのしゅんけい</sup>をギターに据え、自分は歌に専念するバンドを作っていた。

「真兮からメールだ。完成したらしい。曲をメールに添付して送ってきた。いや、勝手に送りつけて来たんじゃないよ。俺が以前からできたら聴かせてくれと言っていたんだ。真兮は応えた、『いいけど、時間があれば聴きにきてくれ。時間がなければ君の言うとおりメールで送るよ。…いや、最初からメールしよう。その上で、生で聴きたければ来てくれ』って。それだけのことだ」

哥舞伎はスマートフォンをスピーカーに繋いだ。

古い蛇口を捻る金属音。

聴きようによつてはBluesHarpに聴こえなくもない。シユートした音を強く短く鋭くベンディングで歪ま

せた金切音に。

言葉のない存在の哲学。ただ只管事実と言う、説明のない。是非の判断も絶え果てる無味なる乾燥。陽光の平和なる非情。石の表層部の無機質。

水の音が唐突にする。川のせせらぎや波の音などではない。雨でも瀧でもない。水が管から勢いよく噴き出してコンクリートへジャバジャバ当たる音だ。古い蛇口を捻る、きゅきゅつきゅる、という音の後だから水道水に違いない。蛇口から出る水の音に相違ない。

少し遠く人の会話が聞き取れる。日常生活の一部を切り取ったような感じだ。何だか白っぽい暖かい日差しさえ感じられる。誰かがどこかで古いラジカセのスイッチを入れる、ぐがしゃつ、という音がする。すると、本物の BluesHarp の音がラジカセから聴こえる。微かに。瑕だらけの劣化した録音テープから再生されているせいか、ノイズ交じりでかなり聴き取りにくい。ガサガサ、ザーザーした音の向こうから聴こえる感じだ。

しばらくそれが続く。

いつからかわからないほど緩やかに、霧が沸き上がるよう、オーケストラのストリングスの音が静かに、わずかに聴き取れる程度に、じよじよに聴こえ始める。美しい神秘的な、エコーのよう。次第に広がっていく。サラウンドのように立体的な、遠近など空間の広さ、相当な広大さを、感じさせる。旋律は時間をかけて、ゆつくりゆつくりと、籠もれ盛り上がっていく。いつの間にか水の音もブルース・ハープの音もかき消されていた。

今度は弦楽器の緩やかな音の大河の流れの底で、聖歌のような合唱が、最初はひどく小さく、ストリングス同様に少しずつゆつくりゆつくり静かに盛り上がっていく。その合唱は複雑で、十六のパートから成るハーモニーを為していた。

唐突にアザーン<sup>①</sup>のような声が空渡るよう長く伸ばされ、炎え耀くように響く。それに重なるように様々な宗教の祈りの言葉が紡がれる。たとえばドルイドの呪文やサンスクリットの詠唱や仏教の読経など。モロッコのジャジュカやアフリカの打楽器なども雑音。サンバの楽器やタンゴのアコーディオン、アンダルシアの手拍子、フラメンコギター、ギリシアの堅琴。銅鑼や笙や箏の音。尺八の乾いた音。法螺貝やバグパイプやホルンの響き。

再び唐突にトランペットのミュー<sup>②</sup>トされた音が哀愁を帯びつつも鋭く空気を裂く。無機質で乾燥した感じ。ドラムスのリズムとベース音が入り、ジャズになる。ジャズとともにタイムズスクウェアのような喧噪。車のクラクション、人の気、雑踏の足音、音楽、エンジンの音、排気音。

雨の音が入り、霹靂。風や海の音。猿の叫びや象の吼え声、獅子の咆哮、火山の唸り、氷雪が空を切る音。雪を歩く足音、ザックザック。暖炉の炎。

フォークギターの錆びた太い弦をミュートさせ、それを以て単純なリフを刻み、真今が呟くよう、やがて語るように、喋るよう、歌う。終には叫ぶようになる。歌を止めて BluesHarp を吹く。そのサウンドの強く鮮やかな金属的な燦めきが異常な Reality を剥き出し、蛇口を捻る音にも聴こえる。そのあまりの Real さが濃く深く、狂裂奔放で、無限複雑精緻氾濫穢亂、神的な象徴の炎の田燐の陀羅尼。すると…

それが轟音となる。地球が宇宙空間を自転しながら公転する巨大な音だ。地球の数十倍もある炎が上がる太陽の表面は凄まじき紅蓮の焰の海だ。土星や木星や火星や水星も廻る。そんな星々が集まってなす銀河系は輝き燃える炎の渦のようだ。銀河が数千個集まって銀河団をなし、銀河団が連なつて一億光年以上の広がりを超銀河団をなし、さらにそれが連結して超銀河団複合体をなす。既に想像を絶す。一〇の一〇乗のその一〇乗の一二三乗光年という大きさの宇宙の巨大さゆえの静寂の轟き。さらに宇宙の外の並行宇宙、これら一切大三千宇宙の凄絶なる巨大さ。

それは萬物萬象によつて構築されている。三千宇宙をなす音楽とは何もかもありとあらゆる一切であるということ、それゆえその正反対であり、否定であり、すなわちすべてであつて、いや、すべてではなく、諸々の中の一部であつて、諸々の中の一部ではなく、何か一つであり、何か一つではなく、一つだけであつて、それ以外ではない、それ一つである外一切ではない、ありふれた、くだらない、平凡な BluesHarp の一音の無際限自由。

歌う。

「さてさて、朗々述べたる大敷衍。だがいったい、何を言おうか。何を決定すべきなのか。昼も夜も、考え抜いた末、想うのは、これほど考えていても、考え所詮はインパルス、そういう名の物的現象（我々が現在見ているものが事実ならば、だが…）さあ、是非も正誤も、真実という、価値基準設定もインパルス。あるいは分泌される脳内の、神経伝達物質。あゝ、畢竟、藁屋根の、囲炉裏の前で婆さんが、草鞋を編んで、孫の娘に、甕から杓で水を汲めよと、さようなことではない。それに過ぎない。いや、それでさえない。何も書かれていない白紙の冊子が、卓に擺かれ、それが小説。指揮者がステージの上に立ち、演奏せず指揮棒振らず、そのまま辞儀して去るのが楽曲。額縁のみで、絵のない絵画。有無もない。可否もない。ただ事実があるのみ。だから小生ら、果敢に生きよう。正しいと、以（おも）うことを、堂々と、為そうよ。命儻し」

聴き終えて哥舞伎は言つた。

「よくできてんな。だが趣味じゃない」